

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 15 日現在

機関番号：12613

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26380645

研究課題名(和文)戦後日本の質的社会調査の系譜とリサーチ・ヘリテージとしての継承可能性の経験的研究

研究課題名(英文)An empirical study on the history of qualitative social research in post-war Japan and the possibility of its succession as Research Heritage

研究代表者

小林 多寿子 (KOBAYASHI, Tazuko)

一橋大学・大学院社会学研究科・教授

研究者番号：50198793

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：戦後日本の社会学における経験社会学的研究業績のなかでとくに質的調査による成果に着目し、質的調査データを社会的知の遺産としてとらえ、「リサーチ・ヘリテージ」としての継承の可能性を考える研究に取り組んだ。社会学的研究アーカイブズの事例調査と質的調査の先駆的社会学者の資料群調査という二種の調査を実施した。社会学者個人の研究の軌跡との関係で質的調査の系譜を捉えなおし、1950年代60年代という質的研究初期の時代の調査状況を明らかにし、質的調査研究の継承可能性を考察した。

研究成果の概要(英文)：We conducted research focusing on the results of empirical sociological studies, especially regarding qualitative research in post-war Japanese sociology, considering the possibility of the succession of these qualitative research data as the inheritance of sociological intellect, or what I term 'Research Heritage'. Two kinds of investigation were conducted; the first was a case study on sociological research archives, and the second was a survey of the documented works of qualitative research performed by a pioneer sociologist. Rethinking the history of qualitative research, through the relationships with the trajectory of that researcher's sociological studies, and clarifying the research situation in the 1950s and 1960s, in the early days of qualitative researches early days of 1950s and 1960s, we explored the possibility of succession the qualitative research.

研究分野：社会学

キーワード：質的社会調査 リサーチ・ヘリテージ アーカイブ化 質的調査データ 社会調査の系譜

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、戦後日本の社会学において産出されてきた経験社会的調査成果をその調査データと調査者である社会学者自身との関係から捉え直し、調査データや調査資料についてリサーチ・ヘリテージとして継承可能性の観点から検討することをめざすものである。とくに質的調査の系譜と継承可能性に着目するが、その背景には質的調査の研究の歴史的経緯と課題があった。とくに1970年代後半からライフヒストリー法リバイバルを経て社会的調査法として質的調査研究は注目されるようになり、1980年代から現象学的社会学やエスノメソドロジー、構築主義の動向を受け理論的視角を深め、研究蓄積が進み、近年ではライフストーリー論の展開でインタビュー法が実践力をつけて臨床社会的分野を切り拓いてきたものの、現在、質的調査データをいかに保存・管理・公開・利用するのかという新たな課題に直面している現状がある。欧米では社会調査アーカイブは1980年代より整備が進んでいるが、日本では本格的な社会的な調査アーカイブは数量的調査データで先端的に進んでいるものの、とりわけ質的調査で立ち遅れ、経験社会的調査全体では社会調査データの公共性という認識自体がいまだ広がっていない。

質的調査で得られるデータは個人の「生きられた経験」に特有の個人情報やプライバシーを考慮して慎重な扱いが求められ、分析や成果の公表に際しても許諾や配慮が不可欠という倫理的問題を孕んでいる。その一方で、研究成果に対する検証可能性の担保も要請される時代となっており、調査ジレンマに直面している。また現在の質的調査で中心的な手法であるインタビューは録音技術の革新の進展でかつての磁気式テープ録音はデジタル化への対応を迫られており、個人的経験に関する質的データ資料の管理・保存問題は急務の課題である。

さらに近年、戦後の社会学を牽引した社会学者たちが鬼籍に入られ、多くの研究資料や調査データが残されつつある。戦後の社会調査の系譜で重要な役割をはたした社会学者の残す調査データは近現代史的な歴史的価値を持ちはじめ、貴重な史資料としての重要性も考慮したデータ資料の保存・管理、活用の方途が考えられなければいけない。そこで社会調査データ資料を社会的な知の遺産としてのリサーチ・ヘリテージととらえ、いかに継承できるのかを具体的に考えることが本研究課題に取り組む背景である。

## 2. 研究の目的

本研究は、日本の社会学における質的調査をもとにした経験社会的研究の成果に注目して、質的調査データ資料は継承されるべきリサーチ・ヘリテージとしていかに適切な

保存と有効な活用がありうるか、質的調査データの継承のあり方の可能性を探求することをめざす。国内外で先行する社会的アーカイブズの事例調査をしたうえで、1950年代以降、豊富な質的調査を手がけて数多くの研究成果を輩出してきた社会学者の所蔵する調査データ資料をめぐって、質的調査データに特有の問題を考え、社会学者自身の研究の軌跡と絡んだ社会調査のコンテクスト性をふまえた質的調査データ資料のアーカイブ化の方途を検討し、あわせて社会調査データの公共性の認識の広がりにも寄与することを目的とする。

## 3. 研究の方法

本研究では、長年にわたり経験社会的研究で数多くの成果を産出してきた社会学者の質的調査データ資料を具体的な研究対象とし、社会学者自身の研究の軌跡と戦後の質的調査の系譜をとおしてその調査研究の特徴を把握し、リサーチ・ヘリテージとしての質的調査データ継承の可能性を探求する。そのために、1)アーカイブ事例調査、2)社会調査データ資料の現状調査、3)質的調査の系譜と質的調査データ保存・活用の方途と課題の検討、という3つの調査を主とする研究方法で取り組んだ。国内外のアーカイブで事例調査をおこない、ヒアリングによりアーカイブ・システムやアーカイブ・ルールを把握し、社会的アーカイブズの問題を理解する。さらに実際の質的調査データの渉猟作業と調査者自身への資料解説インタビュー調査により調査データのコンテクストをあきらかにして質的調査データ継承の可能性を探求し、社会調査データの公共性をふまえた有用なリサーチ・ヘリテージの継承を探究することめざした。

## 4. 研究成果

本研究は、(1)先行するアーカイブの事例調査 国内外の社会的および隣接領域のアーカイブズの実態調査、(2)社会学者の調査データ資料の現状調査、(3)質的調査の系譜とアーカイブ構築の方途と課題の検討という三種類の調査を研究期間中に実施した。

(1) 先行するアーカイブの事例調査では、国内外での研究調査資料のアーカイブ化状況の事例調査をおこなった。国外ではイギリスのブリティッシュ・ライブラリーのライフストーリー・コレクションアーカイブなどで、質的調査データ・アーカイブの事例調査を実施した。国内ではとくに社会学者個人の先駆的アーカイブとして注目される飯島伸子文庫について事例調査をおこなった。

2015年3月、常葉大学附属図書館にある飯島伸子文庫(静岡県富士市)を訪問調査した。飯島文庫は、環境社会学のパイオニアであった飯島伸子氏が残した調査資料や論

文・書籍をすべて一括して整理保存しアーカイブしている日本で最初の社会学者アーカイブである。設立委員の一人であった堀川三郎氏（法政大学）による同行訪問によって設立経緯やアーカイブ化のプロセス、アーカイブ方法の解説を仰ぎ、社会学者個人アーカイブの先駆例についての理解を深めた。

本調査をとおして着目したのはアーカイブ構築の方途である。とくに調査データ・アーカイブ化にあたっては、a)アーカイブ化プロセス、b)アーカイブ・システム、c)アーカイブ・ルール、の3点を確立することが要となることがみいだされた。またなによりも安定的なアーカイブ確立のためには、常設的な受け入れアーカイブ機関の存在であり、アーカイブ・データを管理・保存し、公開を維持する機能を果たす機関の重要性があきらかになった。

(2) 社会学者の調査データ資料の現状調査を本研究課題の中心的調査として位置づけて取り組んだ。社会学者森岡清美氏の協力を得て自身が所蔵する1950年代から1990年代にかけて実施した宗教調査や家族研究の調査データ資料やフィールドノートなどの調査資料の実態を基礎調査した。森岡資料の全容を把握し、リスト化作業を実施した上で研究の軌跡と対照して社会調査資料の年代的な位置づけをおこなった。本研究での新たな試みとして調査者自身による調査データ資料の解説インタビューを試み、二次分析に供する際に重要となる調査のコンテクストを記録することを試みた。

研究期間中にとくに、森岡清美氏に同道する現地調査、森岡清美氏自身による調査資料解説、この二つの調査実践に重点をおいて取り組んだ。

#### 森岡清美氏との現地調査

##### 1 2015年8月山形調査

山形県長井市にある寺院で明治時代の白川党の一員として浄土真宗大谷派の改革運動で活躍した井上豊忠のライフストーリー研究のために資料調査ならびにインタビュー調査を実施する森岡清美氏に同行して、その調査活動の実際について取材をし、具体的な調査実践の様子を記録した。森岡社会学を基礎づける調査実践についての貴重なドキュメントを得た。

##### 2 2015年9月三重県調査

三重県伊賀市において森岡清美氏の社会学的研究の出発点となった「農村社会」研究の調査地や「宮座と村落社会構造」研究の対象地などを訪問し、森岡氏自身の解説を記録しながら、日本の社会学の質的調査研究の初期研究史を跡づける調査をおこなった。

#### 森岡氏自身による調査資料解説

2014年10月と2015年2月の二度にわたり、調査資料群の解説の機会を設け、当時、

おこなった調査の実際と調査データ、調査をもとにしたアウトプットの実際（論文あるいは報告書）に言及しながら、当時の調査の補足説明と調査実態について解説していただいた。これらの調査資料解説を通して、1950年代から80年代にかけて日本の社会学において先駆的であった村落調査・宗教調査・家族調査の実施状況や経緯があきらかになった。とくに戦後の質的調査の初期形成期の実態については、1950年代60年代には戦前期の社会調査の批判的継承、占領期のアメリカ社会学の導入、九学会連合等の学際的共同調査の影響など複合的な研究状況のなかでとらえることが可能になった。

(3) 質的社会調査の系譜と質的調査データ継承の方途と課題の検討では、事例調査で得られたアーカイブ化の実際を基にして、森岡調査データ資料群とその解説をもとに、とくにa)調査成果からみる調査実践の特徴、b)調査データ資料の精査と倫理的配慮、c)社会学者の研究の軌跡と調査キャリア、この三点を課題として検討することに取り組んだ。この検討をとおして戦後日本の社会学における質的調査研究の成立過程を森岡の質的データ資料調査をもとにとくに初期研究に焦点を合わせて考察を深めている。膨大な調査資料データであるがそれらをデジタル化し整理しつつ、いかなるアーカイブ構築が相応しいのかあるいは質的調査データの活用の方途がありうるのか、問題点を整理しながら探求し、リサーチ・ヘリテージとしての経験社会学的研究の継承可能性を考えていくことが今後のさらなる課題である。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計10件)

小林多寿子「日本の自分史実践における「第二の生産者」と自己反省的言説」『法学研究』90-1 2017年 476-494頁(査読無)

小林多寿子「シンポジウム講演録「歴史と記憶とオーラル・ヒストリー」」『近代日本研究』33巻 2017年 316-319頁(査読無)

桜井厚「【インタビュー】対話的構築主義との対話 ライフストーリー研究の展望」『現代思想』2017年3月号 60-84頁(査読無)

桜井厚「ライフストーリー」鳥越皓之・金子勇編著『現場から創る社会学理論 思考と方法』ミネルヴァ書房 2017年 204-205頁(査読無)

桜井厚「ある女性の戦中・戦後の個人的記録から読み解く」『語りの地平：ライフストーリー研究』1巻 2016年 113-136頁(査読無)

桜井厚「屠場へのまなざし」『すいへい・東京』45巻 2016年 62-80頁(査読無)

桜井厚「オーラルヒストリーとジェンダー史 歴史叙述との関連で」『ジェンダー史学』11巻 2015年 43-49頁(査読無)

桜井厚「個人史の語りと歴史との接点 オーラル資料の構成と解釈」『歴史評論』777 2015年 60-72頁(査読無)

桜井厚「ライフストーリー研究の展開と展望」『日本語教育学としてのライフストーリー 語りを聞き、書くということ』三代純平編 くろしお出版 2015年 304(77-110)頁(査読無)

桜井厚「被災直後に人びとはどのように「水」を得たか」『震災経験のライフストーリー 立教大学大学院社会学研究科 2014年度プロジェクトC報告書』2015年 81-97頁(査読無)

〔学会発表〕(計4件)

KOBAYASHI, Tazuko 「Voices and Self-Reflective Discourse of Facilitators Involved in Japan's Autobiographical Movement」International Sociological Association 3<sup>rd</sup> forum of Sociology 2016年7月12日 University of Vienna (Austria)

桜井厚「戦後史の経験を語り継ぐ ライフストーリーから見えてくること」日本オーラル・ヒストリー学会 2015年9月12日 大東文化大学(東京都板橋区)

桜井厚「質的調査法「ライフストーリー研究入門」～インタビューの相互行為の視点から～」日本語教育学会 2014年10月25日 早稲田大学(東京都新宿区)

小林多寿子「生活学ヘリテージ・プロジェクト 生活学会設立の時代と生活学の思想」日本生活学会 2014年5月19日 青山学院大学(東京都渋谷区)

〔図書〕(計3件)

野上元・小林多寿子編著『歴史と向きあう社会学 資料・表象・経験』ミネルヴァ書房 2015年 359(227-247, 323-348, 355-359)頁

桜井厚・石川良子編『ライフストーリー研究に何が出来るか』新曜社 2015年 259(21-48)頁

桜井厚・岸衛編『誰も知らない屠場の仕事』創土社 2015年 271(3-50, 77-146, 247-266)頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小林 多寿子 (KOBAYASHI, Tazuko)  
一橋大学・大学院社会学研究科・教授  
研究者番号：50198793

(2) 研究分担者

桜井 厚 (SAKURAI, Atsushi)  
立教大学・社会学部・特定課題研究員  
研究者番号：80153948  
(平成28年度より研究協力者)